

日本の子どもの主体性の向上のためにできることは何か？

What can we do to improve the positiveness of Japanese children ?

井上 瑠渚 金 秀娥 宮本 茉由 森永 千浩

Inoue Luna Kim Sua Miyamoto Mayu Morinaga Chihiro

指導者 加納 満夫教諭

Supervisor: Kano Mitsuo

【要旨】

一般に、日本人は外国人と比べて主体性が足りていないように思われる。私たちは、それを高校生活を通して痛感している。そこで、日本人がより世界で活躍できるようになるために、学校の教育制度の改善を提案する。

【Abstract】

In general, Japanese people seem to be less aggressive than foreigners. We are keenly aware of it throughout our high school life. Therefore, in order to be able to play an active part in the world, we propose the improvement of the educational system of the school.

【研究のきっかけ】

普段の学校での生活を通して、授業中の主体性が足りないと感じていた。また、資料1を見て、「確かな学力」のうちの様々な問題に積極的に対応する力が足りていないように思った。日本全体を変えていくために、先生からの働きかけだけでなく、私たち生徒が自主的に改善していく姿勢を持つことが大切だと思った。そこで、まずは、本校の教育制度を改善していこうと考えた。

(資料1 文部科学省が定義した「生きる力」を構成する3つの要素)

「確かな学力」：基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力。

「豊かな人間性」：自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性。

「健康・体力」：たくましく生きるための健康や体力。

【仮説】

日本人は外国人よりも主体性が欠けている。こういった状況には学校生活が大きく関係しているのではないかという仮説を立て、学校の教育制度の改善が必要だと考えた。そこで、小学生の時期から改善していくことにした。

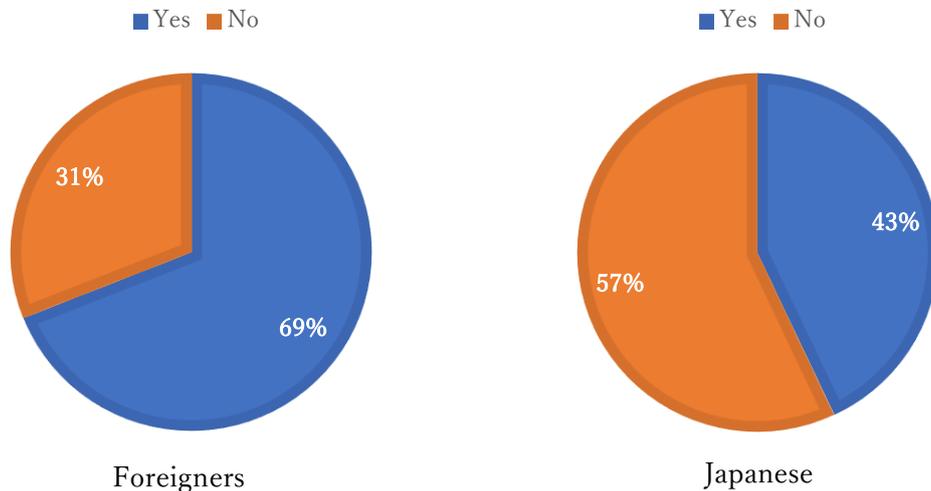
【調査方法】

浅草、オーストラリア、マレーシアでのフィールドワーク、本校生徒へのインタビュー、オーストラリア、シンガポール、マレーシアでの学校見学、生徒たちとの交流

【調査結果】

*インタビュー結果

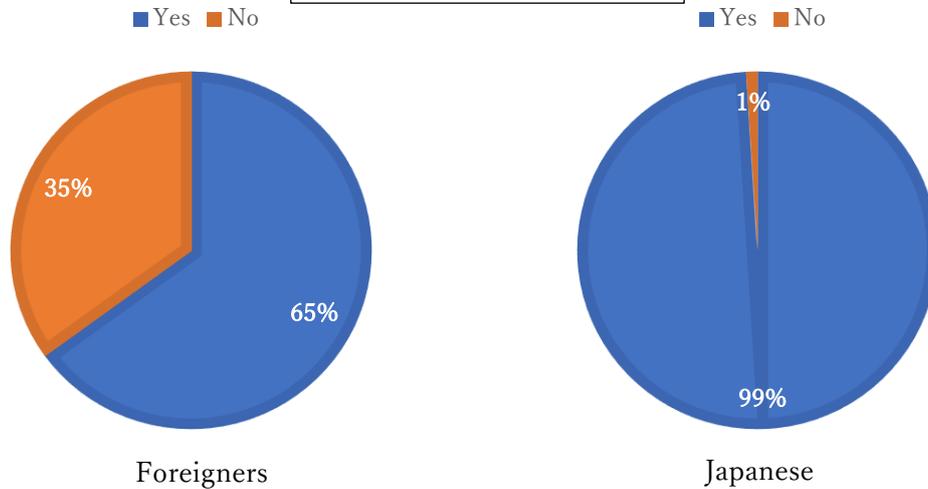
Do you play any sports?



「スポーツをしていますか?」という質問に対しての結果は、外国人の方が割合が高かった。このことから、スポーツをするには必ず誰かと関わらないといけないため、コミュニケーション能力が付き、積極的になるのではないかと考えた。

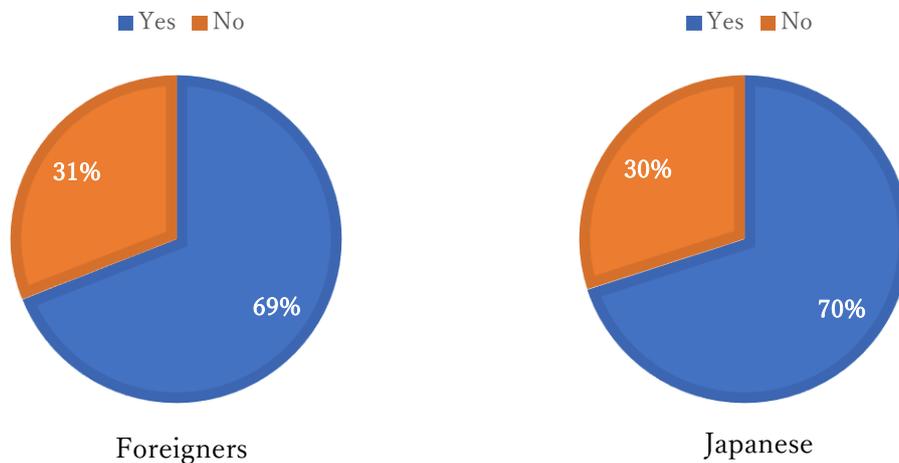
確かに、海外研修を通して、外国人は日本人よりもスポーツを楽しんでいるようにも感じた。会話をしながらスポーツをしており、ミスしても声をかけあいながら楽しくやるという雰囲気があった。

Do you take any lessons?



「習い事をしているか」という質問に対しての結果は、外国人の方が多いというものになった。習い事もスポーツ同様、先生や仲間とのコミュニケーションが不可欠である。学校以外の場所で、色々な人と関わることでコミュニケーションをとる機会が増え、活発になると考えた。また、習い事は同じ目的をもって集まっている場合が多いため、より積極的になると考えた。

Do you like going to school?



「学校に行くのは楽しいか?」という質問に対しての結果は、外国人と日本人で差はほとんどなかった。このことから、学校が楽しいかどうかに関係はないのではないかと考えた。

*海外研修で感じたこと

- 1クラスの人数が少なく、20人ほどだった。
- 授業の雰囲気や和やかで常に話していた。

- ・先生と生徒の距離感が日本よりも近いように感じた。
- ・表彰された生徒にはバッジが与えられていた。(オーストラリアで行った学校のシステム)
- ・体育の授業で、男女の垣根なく楽しんでいる様子が見られた。
- ・オーストラリアの学生のほとんどはアルバイトをしていた。

【主張】

私たちは上記の結果より、2つの改善案を提案する。

①クラブ活動について

フィールドワークや生徒へのアンケート調査により、スポーツをすることによって主体性が向上するのではないかと思った。私たちは、多くの小学生にとって最も運動できる環境は習い事であると考え、小学生が習い事をするのが主体性を向上させることに繋がると結論づけた。しかし、習い事は全員ができるものではないので、学校での生活の中に習い事の良さを取り入れることはできないかと考えた。

そこで私たちは、現存のクラブ活動をより良いものにする方法を提案する。現在、多くの小学校では、クラブ活動は児童が同じ小学校の児童とスポーツを楽しむ形だと思われる。これを主体性の向上の点において考えると、他校の児童と試合などを通して関わり、普段関わらない人とコミュニケーションをとることで、主体性の向上に繋がると考えられるので、これを機に主体的な人になるための最初の一步を踏み出してほしい。また、今回の研究ではスポーツを通じた主体の向上に焦点を当てたが、同様のことが文化系のクラブ活動においても言うことができるのではないかと考える。

②自分の力で考える

海外研修での体験や日々の学校生活から、自分の力で考えることは積極的になることにつながると私たちは考えた。自分の力で考えることにより考える習慣が身につく、自分たちの意見を持つことができる。そうしたら、自分の意見を言う機会が増え、自信を持ち、主体性の向上に繋がる。

そこで学校で行うことができる改善案を2つ考えた。

まず、授業中にできる改善案を提案する。通常、授業では常に開いてある教科書を初めから開かない、というものである。もし初めから開いてしまうと教科書に書いてある内容だけを読み、自分たちの力で考えることができない。そのため教科書を開かないで、答えを自分たちで見つけようとする習慣がつくと考えた。他にはオープンクエスチョンをするなども提案する。例えば、数学の授業では答えを聞くのではなく、それを解くためのコツや過程を聞く、などということだ。

次はリーダーの数を増やすという案を提案する。現在のクラスのリーダーは学級委員長という役名がついている1人だけの学校が多いと思う。そこで、日替わりにクラスのリーダーを決め、全員がクラスのリーダーになれるようにする。また、縦割り班活動のように、他学年との掃除、活動などで、リーダーとして周りを引っ張っていくという機会を増やす。このリーダーでの活動を通して自分から動く、自分から考える習慣が付き主体性の向上に繋がると考えた。

【実践例】

私たちの考えと似たようなことを行なっている実践例は次のようなものがある。

・学習指導教師の声かけ

玉入れの場合「どうしたら、籠にたくさん玉を入れることができるかな？」

大玉運びの場合「どうすれば、大玉を運びやすいかな？」

・授業への参加意識を高める工夫

授業中、先生はよく机の間をゆっくりと回りながら子どもたちの近くに寄り、ノートを覗きこんで「あ、それおもしろいなあ」などと、どんな発想もしきりに褒めます。そして前の黒板に戻った後、「〇〇君、さっきノートに書いていた式、紹介してくれる？」「〇〇さんさんの考えはどう？」などと、正解から間違いまで、様々な児童の考え・発想をすぐに授業に還元し、先生と児童とで共に作り上げられていく活発な授業となっている。（「なんで？」で主体性を養うクリエイティブな授業より）

【まとめ】

主張で述べた改善案を提案することによって、小中学生の意識、さらに学校の先生方の意識も変わっていくことを望む。

【謝辞】

本研究を進めるにあたり、ご指導をいただいた先生方、インタビューに答えてくださった全ての方に感謝の意を表します。

【引用文献】

- ・松田千穂 子どもの主体性を育む支援の在り方 教職教育センタージャーナル 創刊号
- ・2014年 中国の国家予算の割合 <https://blogs.yahoo.co.jp/takeboo1201/63119512.html>
- ・「なんで？」で主体性を養うクリエイティブな授業
<https://edupedia.jp/article/53233f8e059b682d585b6102> (2020年2月閲覧)
- ・「主体的・対話的で深い学び」の実践例を紹介 運動会準備編
<https://kyoiku.sho.jp/7966/?amp> (2020年2月閲覧)